法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

〈あのころの「誌要」〉一九七〇年代、誌要の休刊と復刊

坂本，勝

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要
(巻 / Volume)
100
(開始ページ / Start Page)
22
(終了ページ / End Page)
24
(発行年 / Year)
2019-07-27

〈あのころの「誌要」〉

一九七〇年代、誌要の休刊と復刊

坂本　勝

私が法政大学日本文学科に入学したのは一九七四年四月、卒業は一九七八年三月。その間、刊行された『日本文学誌要』は一九七四年九月の臨刊号の一度だけだった。どうしてそのような事態になったのか、その間の状況をまず確かめておきたい。ただ、臨刊号がでたときは、まだ、私は学部の一年生で、誌要の存在も、また当然のことながら、臨刊号が出たことも知らなかった。そこでまずは、臨刊号前後の誌要の紙面を通して、およその経緯を辿っておく。臨刊号が出る直前の誌要の刊行は、一九七〇年三月の二十二号である。二十二号から臨刊号まで、約四年半の空白がある。二十二号まではほぼ毎年一回以上の間隔で定期的に刊行されていたので、この四年半の空白に至る状況は、当時の誌要と国文学会を考える上で無視できない。

六〇年代から七〇年にかけて、法政大学を含めて、全国の大学には「学園紛争」の嵐が吹き荒れていた。なかでも六〇年代後半は、七〇年安保、七二年沖縄返還を控え、戦いの場所は、個別の大学から街頭を中心とする政治的な場所へと、その軸足を移していった。その頃の法政大学の状況は、学内問題に加えて、一、二の政治セクトを除き、ほとんどのセクトが拠点化を目指して、対立と抗争を繰り返していた。一九七〇年八月には、ついに法政大学構内で死者が出る事態に至り、混迷は深まる。そうした状況の中にあって、臨刊号が四年半ぶりに刊行された。

その編集後記には、当時の誌要と国文学会が直面していた問題が、率直に記されている。それによると、当時全国の大学に及ぼうとしていた国家権力介入の動きに対して、国文学会は一九六九年六月に、「政府および自民党が一九七〇年の安保問題にそなえてこのような学問教育破壊の企てを強行しようとしているのにたいして、われわれ日本文学の研究および教育に関係ある者として強く反対の意志を表示せざるをえない。政府および自民党は速やかにこれを撤回すべきある。」との「声明」を発表した。この「声明」はただちに政府、各大学文学部、各学会などに発送された。おなじ席上で、誌要二十一号（一九六八年六月）以後、発行が大幅に遅れていること、また学会誌としての基本的性格を再検討すべきことなどが、益田勝実先生から提起されている。しかし、その問題提起を十分に受け止められる客観的状況になく、総会以後、「大学闘争のため、事務的、物理的保証を失って事実上休業状態で今日に至った。」と

ある。こうした状況の中で誌要二十二号は刊行された。ただそれが問題の本質的な解決の上でなされたものでなかったことは、編集後記末尾の「70年6月を目前にして、大学がどうあるべき、どうなるか、私などに論ずる資格もありませんが学生、大学人、研究者、教育者としての場で、それぞれ多忙であろう会員諸兄にこれだけは訴えておきたいと思います。わが国文学会も〝70年問題〟〝大学問題〟と決して無縁でないということ。そして、できるならば、この号が旧態の最後、新体の端緒となりますように。」との勝又浩先生のことばから伝わってくる。

この二十二号刊行の後、四年半後に刊行されたのが冒頭に記した臨刊号である。ただし、編集は国文学会ではなく、日本文学科学生委員会である。その冒頭に小田切秀雄先生の「刊行にあたって」との文があり、「これは、一九七三年秋から冬にかけて行なわれた法政大学日本文学科学生委員会主催の「文学講座」の全容である。このような完全な形でお伝えできることをよろこびたい。この講座は学生委員会の諸君の手で企画・推進・実現され、多くの聴衆を集めた。国文学会は講座の経費を補助し、またこれの刊行の費用を負担した。ここ数年はほとんど無活動状態に陥っていた国文学会の活動の再開のため、また停刊していた会機関誌『日本文学誌要』復刊のため、一つのステップとなることを期待して、学生委員会の計画にこのような形で協力したのである。」と述べている。講座のタイトルは「戦後文学への問い」、執筆者は小田切秀雄、柄谷行人、真継伸彦、黒井千次、長田弘、北川透、森川達也の諸氏である。

臨刊号発刊後、二十三号が出るのは一九八〇年二月。この間、約五年五ヶ月の空白がある。この空白期が私の全学生時代ということになる。さきの「声明」が出された一九六九年は、法政大学においては「全共闘」と大学当局の「話し合い」により、大学の混乱は「正常化」した時期でもある。ただそれが真の「正常化」とはほど遠いものだったことは、当時の大学の雰囲気から私たちにもよくわかった。大学に入ったけれども、当時は休講がしばしばで、ロックアウト、セクト間抗争なども後を絶たなかった。毎日教室で勉強するという雰囲気ではなかったので、私自身は図書館と、当時会館したばかりの学生会館のサークルボックスをふらふらしているような日々だった。サークルボックスにいると、他のサークルから「今日の午後は学内デモだから何人か出してくれ」といった連絡もよくあった。デモといっても、55・58年館の1階を練り歩く程度で、デモのテーマはその都度、学費値上げ阻止、サークル規制、表現の自由といった問題を掲げてなされたが、ただそれで何かが解決する、という「気概」を持っていた友人たちは少なかった。わたし自身も、ただ学館でゴロゴロしながら本を読んでいるだけでは、何やら後ろめたい感じもあって、たまにデモの後ろについて行く、という感じだった。すでに「正常化」はなかば空洞化し、ふたたび、学生一人一人がそれ

ぞれの問題を見つめなおす、という雰囲気だった。二十三号に至る空白期は、また、私達学生もある種の空白感を抱えていた時期だった。ただ、この空白期と空白感は、その後どのように、人それぞれがゼロからの出発を期していくか、そのための揺籃期でもあったように思う。誌要の休刊、復刊の経緯はそのことも語っていると思う。

（さかもと　まさる・本学教授）